

ソニー教育財団×ぐうたら村 保育実践ゼミナール
「やってみよう！科学する心×いのち真ん中社会の保育実践」 最終報告書

『虫ホテルをつくろう！』

社会福祉法人ウエル清光会 仁川ウエル保育園 村井 心

〇はじめに・・・

私は春から仁川ウエル保育園に入職し、これまでと違う保育に触れまだ自園のことすらわかっていないような状態で日々の保育に取り組んでいた。今までソニー教育財団のことも、ぐうたら村のことも知らず知識がない私だったが、昨年度2期生の先輩が実践に取り組まれたご縁から今回の実践ゼミを知り「科学する心」って何？いのち真ん中社会って…？わからないけれど、知りたい！新しいことに挑戦してみたい！という気持ちで、参加することにした。

〇子どもたちの姿

今回の実践を行うのは私の担当する2歳児クラスの26名。(2グループで過ごしているため、主に1つのグループが中心となって活動しながらもう一方のグループとも活動を共有して取り組んだ。

自然の中で遊ぶことが好きで虫にも興味がある子が多いが、自分ではなかなか捕まえることが出来ず保育者が捕まえた虫を虫かごに入れて取り合いになったり、手に乗せた虫を手放したくない気持ちから握り潰してしまったりという場面が多くあった。そこで、虫のお家を作ってみては？と考え取り組んでみることにした。

〇虫ホテルをつくろう！

子どもたちの虫への興味を今回の実践に繋げていきたいと思いつつも、夏の暑さで園外へ出かける機会が減り虫との出会いも減ってしまったことからなかなか進められずにいた。

室内に写真と簡単な特徴を書いた手作りの図鑑を用意し、虫への興味を繋ぎながら過ごしていたある日、保護者からクワガタムシを寄付して頂いたことをきっかけに飼育活動を始めた。子ども達はとても興味をもち観察していたが、なかなか姿を見せてくれないクワガタとの関わり方には難しさも感じながら過ごしていた。



虫ホテル作りでは、園の倉庫に使用していない大きなプラスチックのカニの容器があることを知り、この容器を使うことにした。子ども達には様々なインセクトホテルの写真を見せて、“虫の家を作ってみない？”と提案したところ「やってみる〜」「手伝ってあげる」と畑から土や草を運び始めた。しかし、アリ以外の虫は見つけれない環境でどうしていいか…と悩んでいた時に2つの発見があった。

1 つ目は飼育していたクワガタの幼虫を発見することができ、“土の中に虫がいる”というイメージがもてたこと。目に見えないところでクワガタがちゃんと生きていて、赤ちゃんが産まれた！と喜んでいた。



2 つ目はキンダーのバグホテルにアゲハチョウがとまっているのを見つけたこと。本当に虫が来るんだ！と目をキラキラさせていた。

この2つの出来事をきっかけに、子どもたちが今まで以上に虫ホテル作りに意欲的に取り組むようになった。



○どうやったら虫がくるのかな？

インセクトホテルの写真やバグホテルをお手本に、子どもたちと足りないものを考えた。「木も入れないと」と気づいた子の発言から、捨てられていたケーブルドラムを使って木箱を作り、散歩先で見つけた木を入れてみたり、夏野菜の栽培で使ったあとの土をもらいにいき少しずつ環境を変化させていった。

“子ども達の目につきやすい場所で”と考えクラスの目の前に虫ホテルを設置したが、園庭なので他のクラスの子が中に入ろうとしたり、木の枝を取ってしまったりすることで環境が崩れてしまっていた。そんな時にキンダークラスの活動の1つに郵便屋さんがあることを知り、全クラスに手紙を書いて虫ホテルの活動を伝えることにした。すると、他のクラスの子どもからも「バグホテル作ってるんやろ？」と松ぼっくりを貰ったり大切に扱ってくれる子が増えた。



同じ2歳児の別のグループの子ども達も手紙を見て更に関心をもち、散歩先にはバッタやカマキリがいるのに園庭にはいない…葉っぱがないからじゃないか？と気付いて散歩先から葉っぱを持って帰ってくれたり、ツルのところにバッタがいたから持って帰ってみよう！と届けてくれた。お芋の畑にもたくさんバッタがいたから、お芋ほりの後でツルを貰ってみよう！と虫ホテルの環境を子ども達もいっしょに考えて取り組めるようになっていった。



○いろいろやってみたものの・・・



色々やってはみたが、虫が住み着いている様子はみられなかった。また、自分たちで捕まえた虫を入れても居なくなってしまうことにショックを受け「いなくなるから虫入れたくない」と訴える子もいた。そこで“美味しい土、フカフカの土がいいのかも”と提案し、畑にいるミミズを引っ越しさせてみようと思ったり、お茶の出がらしを使って土を再生させることに取り組み始めた。



キンダーのバグホテルで植物に虫が集まってきているのをみて、虫ホテルに芽が出たドングリを植えてみたり、虫が好きなお花を植えてみようと考えた。



○中間報告を終えて・・・

自園にある使われていないものを使って虫ホテルを作り始めたが、キンダーのバグホテルで使っている木材の廃材とは違ってプラスチックの容器が虫にとって過ごしにくい環境の要因となっていることを学んだ。今のままでは上からも横からも冷えてしまい容器の中央の狭い場所でしか生きられない陰い環境になってしまっているのを、植物・食物との関係も取り入れながら環境を改善していくことにした。



○虫ホテルを住みやすく・・・

カニの容器に温かさ、ぬくもりをプラスする為に容器と土の間に段ボールを間に挟んでみたり、机に乗せて高さをプラスして地面からの距離を出してみた。また、緑を増やそうと植物を植える際に虫のお家を作っているという子ども達のイメージを大事にしたかったので、木の扉をつけて視覚的にも楽しみながら植物との区分分けを行った。そして、どのクラスの誰が見てもわかるように名前を決めて看板をつけた。



○お花を植えよう！

子ども達といっしょに2種類のお花（フリージアの球根とれんげの種）を植えて育てている。取り組み始めたのがすでに寒い時期でなかなか芽が出なかったが、「大きくなってね」と話しかける子がいたり毎日のように様子を観に来る子の姿もあった。



正月休みを越えて球根から芽が出てきたり、暖かい日が続いてれんげの芽が出てきたことで「かわいいお花咲くかな？」と興味をもってお世話をする子も増えた。

お花の芽が出たことをクラスで喜び合った翌日、今まであまり活動に興味なかった S 児が突然私の手を引いて虫ホテルへ向かい、「見て！芽！出た」と伝えてくれた。友だちと順番にジョ

ウロで水をあげてお世話をする姿がみられるようになり、今回の活動が子ども達にとっても、身近な自然と関わり大切に思う気持ちに繋がっていることが感じられた。



○いちご植えたい！

ある日の食事の時間に「大根って何からできてるの？」「リンゴはになるの？」と子どもたちが疑問をもって会話をしていた。その時に「いちごは何から？」に対して「種からできるよ」と答えると「え？種から？」「どんな種だろう？」「虫ホテルに植えたらいいんじゃない？」「え～！？いちごでできたらどうする？」「食べた～い」「いい匂いって虫くるかもよ！」とワクワクする会話が盛り上がっていた。子ども達からのやってみみたいことが出てきたことに、驚きと嬉しさを感じ、みんなで挑戦してみたいね！と期待している。



○実践を通して ～子どもたちの変化～

虫ホテルづくりの実践をしていく中で、虫たちに対する子どもたちの関わり方に変化を感じている。苦手だった子も虫に触れたり、自分で捕まえられるようになった子も多い。また、「これ虫さんにあげよう」「(たくさんの穴が開いた葉っぱをみつけて)ダンゴムシが食べたんじゃない？」「虫もイチゴ食べたらいいいよね」などと小さな生き物たちのいのちを感じている姿をたくさん目にするようになった。植物に対しても、「おおきくなってね」「なんのお花が咲くのかな？」「どんぐりからニョキニョキ（芽）が出てる～」と2歳児なりに身近ないのちを感じる力が育っていることを嬉しく感じている。



○最後に・・・

今回の実践は私自身が日々の保育を通して行う持続可能な社会の実現について知ることから始まった。新しく購入するのではなく、今自分たちの身近にあるものを利用するという視点から虫ホテルづくり、お茶の出がらしを使った土の再生、イチゴの種を採取して栽培してみる…といった活動を行うことで新しい気付きを得ることができた。実践はまだまだ途中で今後も続いていくが、自分自身が持続可能な社会を意識して自然に目を向けて保育をすることで子ども達も身近な自然を知り、興味をもつきっかけとなっていると感じている。この小さな小さなきっかけが、自然や環境に目を向けられる子ども達を育てていくことが、いつか地球が抱えている問題をより身近に自分たちのこととして捉え、考えられる社会に繋がることを願って今後も、“いのち真ん中”を胸に子どもたちと関わっていききたい。

